

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	佐賀県	市町村名	佐賀市	大学名	
派遣日	令和6年10月25日(金曜日) 14:00~16:30 13:30 受付 14:00 開会【開会・講師紹介・研修会日程】 佐賀市の日本語指導について【概要説明】 14:10 佐賀市日本語指導担当教員による実践発表 (1) 教科等学習指導について (2) 学級づくりについて (3) 保護者への支援について 15:00 グループ演習【協議・講師：横溝氏による助言】 15:30 横溝氏による講演 16:30 閉会【謝辞、連絡、アンケート】				
実施方法	※いずれかに○をつけてください。 <input checked="" type="radio"/> 派遣 / <input type="radio"/> 遠隔				
派遣場所	佐賀市役所本庁4階 大会議室 (〒840-8501 佐賀市栄町1番1号)				
アドバイザー氏名	横浜市教育委員会事務局 小中学校企画課 指導主事 横溝 亮 氏				
相談者	主催：佐賀市教育委員会学校教育課 対象：佐賀市内小中学校教員 佐賀県内日本語指導が必要な児童生徒在籍校担当者				
相談内容	<p>佐賀市では、本年度約50名の児童生徒に対して、日本語指導担当教員や帰国子女等対応非常勤講師による日本語指導を実施している。新しく日本語指導が必要な児童生徒は増加しており、在籍校も佐賀市内全域に散在している。今後どの学校にも日本語指導が必要な児童生徒の転入・編入が考えられ、適切な指導・支援の実施ができる各学校での指導体制づくりが課題となっている。</p> <p>そこで、帰国・外国人児童生徒の実態に応じた日本語指導及び指導・支援の充実を一層進めるため、文科省の「外国人児童生徒等教育アドバイザー」を招聘し、佐賀市内全小中学校の担当者を対象に、帰国・外国人児童生徒への支援についての研修会を実施することとした。参加者が研修内容を身近なものとして捉えられるよう、日本語指導担当教員による実践発表やグループ演習を実施し、その内容を踏まえた講師による講演を行うことで、学校や学級における指導・支援について研修を深めたい。</p> <p>講師へは、帰国・外国人児童生徒に対する学校の体制づくりや学校や学級でできる支援や指導を中心にお話ししていただくよう、依頼した。</p>				
派遣者からの指導助言内容	<グループ演習での参加者の協議を受けての指導助言> 【テーマ：来週、カンボジアから転入生が来ることになりました。学校や学級でどのような支援ができるでしょうか。】 ・来日してすぐの子どもにとって、日本の教室は手掛かりが何もない。1つでも読める文字があると安心感が違う。				

- ・学習活動の例：母語と日本語を組み合わせた学習活動（ひらがな文字カードづくりなど）、避難訓練について45分間かけて丁寧に指導するなど
- ・「異文化共生を目指した学級」の視点をもって体制づくりをする。
- ・来たばかりの子どもへ、最初に教える言葉は「ある」「ない」と「いい」「だめ」（実際に体験させながら、「ある」がわかってから「ない」を順を追って教える）。
- ・JSLカリキュラムでは、日本語を第二言語として使いながら学ぶ力を育成する。個々に応じて、日本語と教科を切り離さず、直接体験して学ぶ。
- ・主体的な活動でやってみたいと思えるようにする。
- ・子どもが学んだことを日本語で言えるようにするため、板書が残っているのが大事。

<講演内容>

【テーマ「外国につながる児童生徒の現状と指導・支援～学校・在籍級・国際教室でできること～」】

○外国人児童生徒等教育担当教員に「求められる具体的な力」

豆の木モデル（外国人児童生徒等教育を担う教員の資質・能力モデル）の提示、参加者は自己評価票を実際にチェックし、外国人児童生徒を指導・支援するための資質について考えることができた。

○日本語指導が必要な児童生徒の現状

- ・全国的に増加、人材不足、予算不足、言語対応の困難、他団体との連携
- ・子どもたちの現状（横浜）
- ・外国人児童生徒等の多様な背景について（言語、文化、入国理由・時期、将来設計、家庭環境）

「多くの子どもたちは日本を受け入れる気持ちが整っていない」「いつも意欲的に学べるわけではない」。言語を学ぶ際には「情意フィルター」があり、子どもたちの情意フィルターを開くよう、環境を整えることが大切である。

○外国人児童生徒等を受け入れる学校管理職の役割について

特に、温かい面接となるよう工夫し、担任を支え、保護者との信頼関係を築くことが大切である。

○外国人児童生徒等を受け入れる日本語指導担当教師の役割について

児童生徒への教育活動、校内や家庭との連携・共通理解、外部機関・地域との連携・共通理解（教育委員会の担当者などとの連絡、学校間の連携、協力、地域との関係づくり）

学級担任も同じような考え方で取り組む。

○日本語指導のプログラム

○日本語指導が必要な児童生徒について

JSL 評価参照枠による日本語の支援について説明。日常会話ができていても学年相当の学習言語能力が不足し、学習活動への取組に支障が生じている場合がある。横浜市では、一斉指導で学習に参加できる「ステージ5」に達しない場合は日本語指導が必要としている。

子どもは日常的に文化間を移動している。学校では日本の文化、家庭では母国

	<p>の文化を行き来している現状がある。</p> <p>○外国につながる子どもたちの指導で大切にしてきたこと</p> <p>平等 (Equality) と公平・公正 (Equity)、必要に応じて必要な支援を行う。</p> <p>JSL カリキュラムの基本的な考え方として、学習に必要なことばは学習に参加する中で身につく。子どもが主体的に活動し、その活動の中で日本語を使うことで、ことばを学ぶ。自分のわかったことを日本語で発信することはとても重要なので、板書が大切。板書にあることを手掛かりに、学んだことを言葉で伝えることはとても大切である。</p> <p>○日本語支援の5つの視点</p> <ul style="list-style-type: none">・直接支援「理解支援」「記憶支援」「表現支援」・間接支援「自立支援」「情意支援」 <p>情意面が揺らぐ中学生には間接支援はとても大切。</p> <p>○外国につながる子どもたちの指導で大切にしてきたこと</p> <ul style="list-style-type: none">・実物・図表・写真・絵等の利用、わかりやすい言葉遣い、わかりやすい授業欲張りすぎず、すべての子どもにわかりやすい支援を。 <p>○外国につながる児童生徒への指導・支援</p> <ul style="list-style-type: none">・児童の日本語の力に合わせた指導の工夫 (視覚支援・短冊、デジタル教科書の利用)・在籍級との連携：担任に「国際教室で学んだことを聞いてみてください。」とお願いし、教室でも言えたら○。・多様性を認め合う学校 (世界のあいさつ運動、国際給食、職員研修：保護者による料理教室を行い、学校へ足を運びやすくする) <p>○子どもたちの自己肯定感を高める</p> <ul style="list-style-type: none">・在籍学級で認められるように、担任と連携。担任、在籍級で認められることが一番うれしい！中学生もほめられると嬉しい・その子しか知らないことを聞く (文化・経験・人・学校・好きな事…)・できることに目を向けて力を伸ばす。・全部にこだわらず「今日できなくてもいい」 <p>明日も学びたい、先生と話したいと子どもが思えるような支援を。</p>
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	<p><横溝氏の講演に対する参加者の事後アンケートより抜粋></p> <ul style="list-style-type: none">・日本全体で外国籍の児童が増えている現状を理解することができた。・大変勉強になりました。先生の外国人児童生徒に対しての温かい眼差しやご配慮に、一人一人の母国への理解や困り感にしっかり向き合っていたかなければという思いを強くもつことができました。・とてもよいお話をきけました。日本語指導の視点で、授業づくりをすることや配慮をすることは、クラス全体のサポートに繋がると思いました。特別支援の視点もまた、同様だと思えます。子どもたちの可能性をしっかり信じられる担任でありたいと思えます。・今回のお話を聞いて、これまでの児童との関わりを振り返って、児童の日本語の力に合わせた指導の工夫が足りてないのではないかと感じました。もっと児童に寄り

- 添って、自己肯定感を高めてあげられるように関わっていきたくて思いました。最初に、ある・ない、次にいい、だめを教えるといいよとおっしゃっていたので、これからまた違う外国につながる児童をもつことになったら実践しようと思います。
- ・子どもたちが日本に来たかったわけではなかったり、ずっと日本にいるわけではなかったりするという話は驚いた。不安な子どもたちに、少しでも安心して日本の学校で過ごしてもらえるように、その子が読めるような母国語の掲示物をしたり、母国語の挨拶で迎えたりするなど、私たちも受け入れる心構えをしっかりとしておくことが大切だと思った。また、実際の指導の映像を見せていただき、ひらがなを楽しく学んでいる姿を見て、日本の外国語活動に似ていると感じた。
 - ・子ども達の習得がとても早いことに驚きました。また、マイノリティの立場になって考えること、保護者の支援もしていくことなどが印象に残りました。
 - ・様々な事情があって、日本に来ることになっていると思うので、あまり学習に対して意欲的ではない可能性があることや、周りの字がほとんど読めない現状があることなど、児童生徒の背景や実態把握を適切に行い、手立てを考えていくことが大切だと思いました。
 - ・大変学びの多い講演でした。先生の実践は、外国につながる児童生徒だけでなく、すべての児童生徒の指導にとっても大切な考え方だと思いました。
 - ・外国人児童生徒等教育担当教員に「求められる具体的な力」がとても参考になりました。実際にチェックをしてみても自分の不勉強さを認識したところです。もっと、相手の立場に立った考え方をしないとイケませんね。
 - ・佐賀では（今のところ）見られない（横浜市の）支援や取組が見られてとても参考になった。

横溝氏の言葉は、日本語指導が必要な子どもへの関わり方や環境の整え方について、大きな示唆に富むものであり、なにより横溝氏の温かい人柄や語り口によって参加者の心に響くものであった。「外国につながる子どもだけではなく、すべての子どもに大切な考え方である」という参加者の声も多く聞かれ、今回の研修は、日本語指導が必要な児童生徒の在籍にかかわらず、参加者はこれまでの指導・支援を振り返ったり、今後出会うであろう外国につながる子どもたちへ何ができるか具体的に考えたりする貴重な機会となった。また、佐賀市とは規模も体制も大きく違う横浜市の取組を知り得たことも、参加者にとって驚きを伴う、日本語指導の必要性を感じる気付きとなっていた。特に、横溝氏が国際教室で日本語ゼロの子どもに具体的に行った指導の話が参加者には大きな反響があり、今後研修を行う際には、実践的な指導の方法について学ぶことで、参加者の実践意欲が高まるように思えた。

事前打ち合わせでは、実践発表を行う日本語指導担当教員への横溝氏からの助言により、日本語指導担当教員の貴重な学びの機会ともなった。また、佐賀市からの概要説明で、学校が受けられる支援を知らせた方がよいという助言もあり、佐賀市だけでなく佐賀県や国際交流協会などの支援事業や指導に役立つサイトなども紹介することができたので、この研修を機会に、佐賀市内各学校での外国につながる子どもたちへの指導・支援について、より理解が深まり、適切な対応につながるのではないかと考えている。

(様式3)

佐賀市では、本研修以外にも、市主催の研修会や日本語指導担当教員による巡回校での校内研修などを実施している。現在日本語指導を受けていない児童生徒であっても、実は日本語指導が必要ではないかという相談を受けるようになり、日本語指導に対する理解の広がりや、児童生徒への適切な支援だけでなく、子どもを見取る教員の姿勢にも影響を与えていることを感じている。また、適切な指導・支援ができる日本語指導者の育成も急務である。

今後も、外国につながる子どもたちが豊かに日本での生活を送ることができるよう、県や関係機関と連携を図り、佐賀市教育委員会として学校に寄り添いながら、相談業務を実施したり、研修を企画・運営したりして、帰国・外国人児童生徒への指導・支援を充実していきたい。

1枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。